に、夜もうちふけて、世の中も去づかなるほどに、齊信民部卿をめして、今宵たゞにはいかゞやまん、朗詠有なんやと仰られければ、いとかしこまりて、去ばし煩ふけしきなるを、人々耳をそばだてゝ、いかなる句をか詠せんずらんと待程に、極樂の尊を念ずる事一夜とうちいだしたりける、たぐひなくめでたかりけり、此句かきたる齊名、やがて御供にさぶらひけり、我句をしもさばかりの人の朗詠にせられたりける、いかばかり心の中のすゞしかりけん、此句は、勸學會の時、攝念山林を賦する序なり、

念極樂之尊一夜、山月正圓、　先句曲之會三朝、洞花欲落、

これは三月十五夜の事なり、九月十三夜に詠せられける、いかにとおぼゆ、但念佛の義ばかりにとれるにや、古人の所作、仰而可信歟、

〔後拾遺和歌集十五雜〕賀陽院におはしましける時、いしたて瀧おとしなどして、御らんじける頃、九月十三夜になりければ、　後冷泉院御製

岩まよりながるゝ水ははやけれどうつれる月の影ぞのどけき

〔本朝無題詩三〕九月十三夜翫月　法性寺入道殿下

閑窓寂々月相臨、從屬窮秋望巨禁、潘室昔蹤凌雪訪、蔣家舊徑蹈霜尋、十三夜影勝於古、數百年光不若今、猶憑前軒廻首見、清明此夕價千金、

星河皎々月蒼々、從屬窮秋最斷腸、訪古無如今夜影、經年豈忘此時光、洛中各傾吾家雪、塞外定疑萬里霜、起倚前軒廻首立、金波朧朗足相望、

〔源平盛衰記三十三〕平氏九月十三夜歌讀事

九月〇壽永二年十三夜ニ成ヌ、今夜ハ名ヲ得タル月也、秋モ末成行バ、稻葉ヲ照ス電ノ、有カ無カモ定ナク、荻ノ上風身ニシミテ、萩ノ下露袖濡ス、海士ノ篷屋ニ立煙雲井ニ昇面影、葦間ヲ分テ漕船ノ、